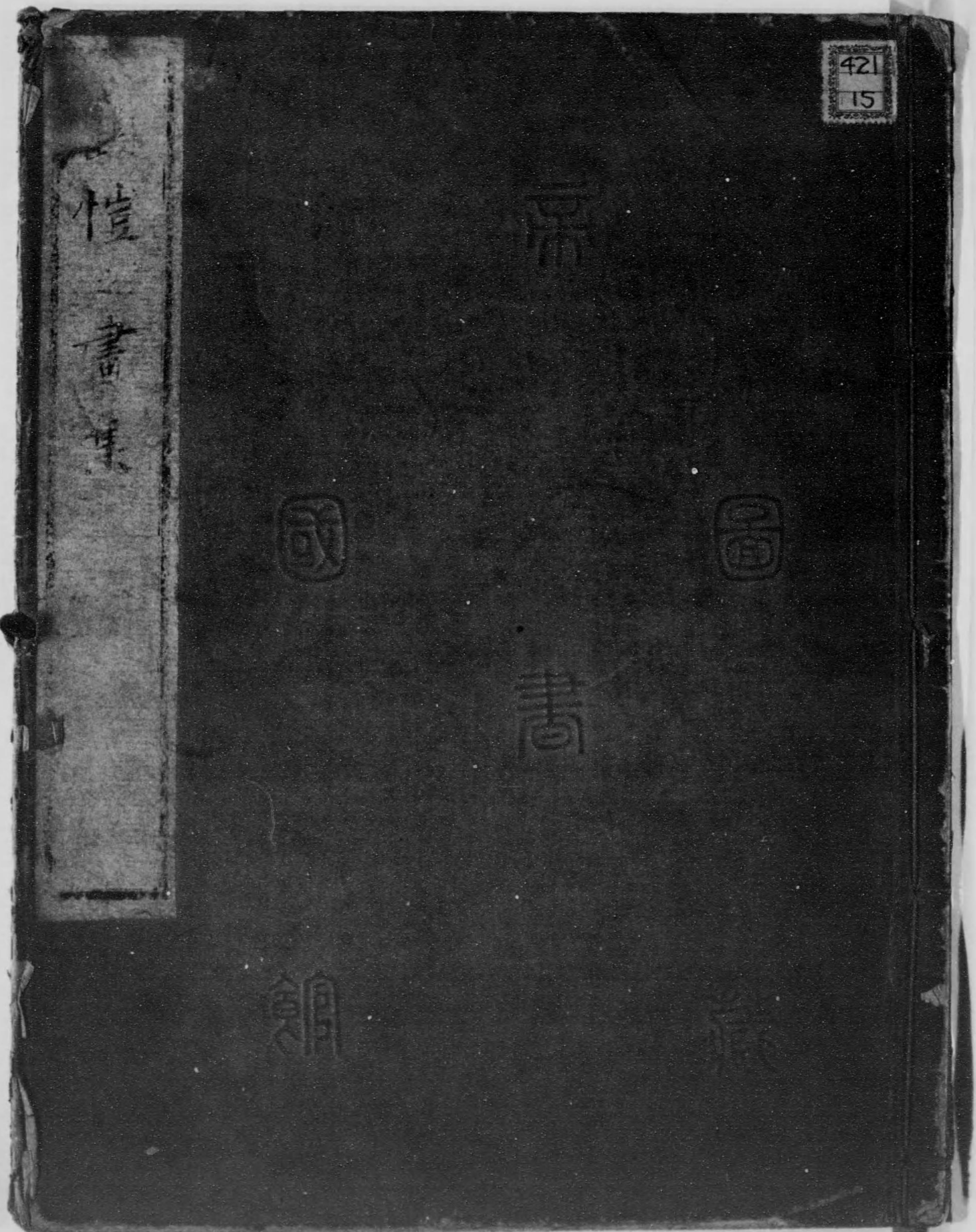


421
15

6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

始



421-15

編者 識

這回刊行の願徳之檢成は眞に作る眞蹟複製は現今大英博物館所藏の珍品中より、直接攝影せるものを製版印刷に附したものであります。筆者願徳之の傳記は別に載録いたしました。故に茲は重複の説明を避けて、其畫の傾向に就いて脚か記述しませう。

私は茲に東洋美術繪覽の跋文に於いて、東洋畫の氣韻說に就いて愚見を陳べ、其末尾に東洋畫に古來傳神の說の有ることを申しました。今この畫集を刊行するに隨ひて、傳神に就いての管見を披瀝する機を得たことを思ひます。願の人物畫は最も傳神の妙を得た所のものとして稱せられてゐるのであります。而してこの傳神の說を爲した古人としては先づ願徳之を以て先とせねばならぬのであります。歷代名畫記、願徳之の項中に「蕉人。帝數年不畫目睛。人間其故。答曰。四體妍媸。本亡關於妙處。傳神寫照。正在阿堵之中」といふ古來有名なもので、あります。所謂傳神とは本來人の肖像を描寫するに其の形貌と共に其の精神をも畫中に寫し出すことを稱する語でありまして、後世に至つては之を押しひきめて、背後に限らず、一切の客觀精神を寫し出す意に用ゐられてゐます。てありますか

之を解する學者によつては、主觀的有る氣韻と對立せしめて、氣韻の畫、傳神の畫と別稱に見るやうに説く人もありますが、私の管見としては、傳神は氣韻の如く、作家の期せずして、おのづから顯はるゝものではなくて、作家の企圖して成る所のものであります。それ故に傳神の畫であつて氣韻を俱有する作品は尠なくありません。氣韻はその畫の傳神なるものであると否とに關せず、其の作家の人格に隨つて畫に現はるゝものであります。即ち傳神とは客觀的事物の端的な印象の把握が繪畫的表現の形式によつて形態を取り、而してそれが申分なく完成せられることを言ふのであります。前に奉いた名畫記の「四體の妍媸本、妙處に關するじし、傳神寫照、正在阿堵の中に在り」といふ願徳之の言を以てても之を證するに足ると思ひます。この方法は東洋古來のものであります。が、かの十九紀末佛蘭西に於ける印象派の方法も——主に「マネー、モネー、セザンヌ等——之に似たものであつたと

を見得らるゝのであります。

大正 3
12.11
内交

序

願愷之畫集

目次

(一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十) (十一) (十二)

女史圖 (部分)

全

全

全

全

全

全

全

全

全

(可不續連ニ故ガルナ分部)

願愷之畫トテ世ニ傳ヘラルモノ多クアリト雖モ眞筆ノ定評アル物極メテ稀ナリト云フ繪家ハ研究ト撰擇ヲ重テ而シテ定評アリ且ク一點ノ疑ヒナキモノヲ此ノ集トナセリ。

傳筆者

願愷之願凱之字ハ長庚。小字ハ庭頭。晉陵無錫ノ人也。博學ニシテ才氣アリ。尤モ丹青ヲ善クシ。圖寫特ニ妙。筆法春蠶絲ヲ吐ク如シ。初メ見ル甚ダ平易ニシテ且ツ形似時ニ或ハ失スル有ル如シ。細カニ之レヲ視ルニ。六法兼備ハリ傳染スルニ遺色ヲ以テシ。微多點綴ヲ加ヘ。暈飾ヲ求メズ。而シテ形勢妙絶ナラザル莫ク。謝安夕之レヲ重シクシテ以テ蒼生有ル以來未ダ之レ有ラズト爲ス愷之人ヲ畫キ成ルボトニ。或數年目睹ヲ點セズ。人其故ヘテ問フ。答ヘ曰ク四體妍態。本ト妙處ニ關スル無シ。傳神寫照。正ニ阿堵ノ中ニ在リト筆テ一姫女ヲ收ビ乃チ形ヲ畫ニ圖モ。線針ヲ以テ其心ニ針ス。女遂ニ心痛ヲ患フ。針ヲ去リ乃チ愈ユ。毎ニ稱慶ガ四言ノ詩ヲ重シクシ。因テ之レガ圖ヲ爲ル。恒ニ云フ。手五絳ヲ揮フハ易ク。目歸鴻ヲ送ルハ難シト。人形ヲ寫起スル毎ニ。時ニ妙絶ナリ。昔テ樂楫ノ象ヲ圖ケ。頰上ニ三毛ヲ加フ。觀者神明ノ殊ニ勝ルヲ覺フ。又テ謝靈ノ石巖裏ニ在ルヲ畫キ云フ。此ノ子宜ク丘壑中ニ置クベシト。筆テ一厨ノ畫ヲ以テ其前ニ糊題シ。臂ク恒云ニ寄ス。皆ナ其妙絶珍秘スル所ノ者ナリ。文、厨後ヲ開キ。竊カニ畫ヲ取り。而シテ縋閉舊ノ如クシ。以テ之レヲ還シ。給キ開カズト云フ。愷之直チニ云フ。妙畫神ニ通ジ變化シテ去ル。亦タ猶ホ人ノ姿仙スルコトキナリト了ニ怪ニ色ナシ故ニ俗ニ傳フ愷之三絶アリ才絶、畫絶、擬絶ト。義熙ノ初。散騎常侍ト爲ル愷之亦タ畫ヲ善クシ。



[The right page of the document is mostly blank and contains very faint, illegible text or markings.]





人風知備其容莫如飾其性之
不飾或德禮之齊之漆之允念江
聖

蘇軾



出其言善千里應之苟違斯義
同象以疑

Vertical inscription on the right side of the illustration.

Small vertical inscription at the bottom right of the illustration.



夫古如微榮辱由茲勿謂去漢靈登無象
勿謂幽昧神懸無靈會無於尔宗天道惡
惡無恃尔貴隆！看墜壁于小星或此收

歡不可以濟亂不可以專實生慢愛則極
邊致亂必損理存固然美者自美翻以
取尤治容求好君子所仇結恩而絕寔
此之由







勿謂幽昧神興無響音無於尔榮天道惡
盈無恃尔貴隆者隆墜于小星戒彼彼
遂比心益斯則繁尔類

印







大正十二年十月十五日印刷
大正十二年十月廿五日發行
(會員頒布)

京都市聖護院中町六番地
編輯兼發行者 後藤博山

印刷者 市川會三

印刷所 京都市木津屋橋西河院西入
市川製版所

發行所 京都市聖護院中町六番地
平安精華社

Y 卅一 (定價四圓)

終

